

### Ⅲ 外部人材（介護の専門家）の試行導入の検証

#### 1 アンケート調査の実施

##### (1) 実施の目的

- ・ 外部人材（介護の専門家）の導入に関する保護者、教員、介護の専門家それぞれの意識を把握する。
- ・ 外部人材（介護の専門家）の導入の効果と、導入拡大に向けての課題を整理する。

##### (2) 実施の対象

- ・ 都立永福学園及び都立青峰学園の肢体不自由教育部門に在籍する児童・生徒の保護者
- ・ 都立永福学園及び都立青峰学園の肢体不自由教育部門に所属する教員
- ・ 都立永福学園及び都立青峰学園の肢体不自由教育部門に配置された介護の専門家

##### (3) 実施方法及び実施期間

###### ア 実施方法

アンケート調査票（資料参照）の配布・回収による調査を実施

###### イ 実施期間

平成22年10月末から11月上旬にかけて実施

##### (4) 調査票の回収結果

	永福学園			青峰学園			合計 (回収率)
	対象数	回収数	回収率	対象数	回収数	回収率	
保護者	67	53	79.1%	27	19	70.3%	76.5%
教員	44	33	75.0%	22	22	100.0%	83.3%
介護の専門家	24	24	100.0%	7	7	100.0%	100.0%
合計	135	110	81.5%	56	48	85.7%	82.7%

- アンケートの回収率は全体で82.7%であり、保護者、教員及び介護の専門家の意識や導入の成果及び今後の課題等を把握するために十分な回答数が得られたと考える。

##### (5) 調査の集計に当たって

- ・ 各設問への回答は、「そう思う」、「まあそう思う」、「あまり思わない」、「思わない」、「どちらとも言えない」の5つの選択肢を用意した。
- ・ 「そう思う」、「まあそう思う」の回答を肯定的見解、「あまり思わない」、「思わない」を否定的見解ととらえて回答率を算出した。
- ・ 「どちらとも言えない」と回答した理由及び自由記述の内容から、全体の傾向や見解の背景等を考察した。
- ・ 集計の結果は、保護者、教員、介護の専門家とも、都立永福学園と都立青峰学園の回答数を合計したものである。

##### (6) 現状と課題の整理に当たって

- ・ 第一に、保護者、教員、介護の専門家それぞれの意識について、集計の結果、全体の傾向、主な自由記述を基に現状と課題の要点を整理した。
- ・ 第二に、教員と介護の専門家の円滑な協働の観点から、「積極的な働きかけ（指示・連絡）」、「児童・生徒の情報の共有」、「授業に関する情報の共有」、「役割分担」、「児童・生徒の安全の確保」の各項目について、現状と課題の整理を行った。

## 2 アンケート調査の結果から

※ 本項においては、アンケート調査の設問との整合を図るため、外部人材（介護の専門家）を「介護士」と記す。

### (1) 保護者を対象に実施した調査結果の概要

#### ア 集計の結果

No.	設 問	そう思う まあそう思う	あまり思わない 思わない	どちらとも 言えない
1	介護士は、児童・生徒の状況を把握し、適切に対応していると思う	67.6%	15.5%	16.9%
2	教員と介護士の連携は図られていると思う	66.2%	15.5%	18.3%
3	人手が増えたことにより、児童・生徒の健康・安全面で目が行き届くようになったと思う	64.8%	14.0%	21.1%
4	介護士が校外学習や宿泊行事に参加できるようになって良かったと思う	87.3%	5.6%	7.0%

#### イ 全体の傾向

- No.1～3の設問では、おおよそ65%の保護者が「そう思う」若しくは「まあそう思う」と回答している。
- No.4の設問については、「そう思う」若しくは「まあそう思う」と回答した保護者の割合が約90%である。
- 「どちらとも言えない」と回答した理由は、「児童の現状を把握した頃に辞めてしまう人が多い」、「介護士の力量に差がある」、「適切に対応してくれる人とそうでない人がいる」といった内容であった。

#### ウ 主な自由記述

- 常時、介護士がいてくれてとても助かっている。細かいところにもすぐ気付いて対応してくれて貴重な存在である。
- 常時、人手が多いのは安心感が大きい。
- はじめはどうなのかなと思っていたが、実際に様子を見てみると、とても一生懸命に子供たちをみている。人手が増えて、子供が一人で放っておかれることもなく、介護士の導入は良いと思う。
- 予算の効率活用、限定される人的資源、教員の能力のフル発揮等を勘案すると、このような選択肢を拓ける方策は当然であり、適切である。
- おそらく画期的なことなのだと思う。外部委託も一つの方法だと思う。
- 多くの人の目で子供を見てもらえるという点では大賛成である。教員とは違った専門性を生かしたサポートを期待している。
- 子供の介護をしたことがない介護士が、昨年息子の担当になり頑張ってくれたが、せっかく慣れたところで1年で辞めてしまい残念であった。
- 1年目は、教員、介護士ともぎくしゃくしていた感があったが、2年目に入ってスムーズになっていると思う。長期の休み明けなど、介護士が辞めていないだろうかという不安が毎回ある。

#### エ 集計の結果から

- 介護士の導入は、保護者におおむね受け入れられつつあると思われる。
- 今後、他の都立肢体不自由特別支援学校への導入と拡大に向けては、専門性の高い人材（介護福祉士の有資格者）の確保・配置と定着に関する具体的方策を講じる必要がある。

## (2) 教員を対象にした調査結果の概要

### ア 集計の結果

No.	設 問	そう思う まあそう思う	あまり思わない 思わない	どちらとも 言えない
1	介護士への積極的な働きかけを行っている	70.9%	20.0%	9.1%
2	児童・生徒の情報の共有に努めている	74.6%	14.5%	10.9%
3	授業に関する情報の共有に努めている	58.2%	29.0%	12.7%
4	介護士との役割分担が明確になっている	49.1%	43.6%	7.3%
5	連携により児童・生徒の安全が確保されている	63.6%	23.6%	12.7%

### イ 全体の傾向

- ・ 「介護士への積極的な働きかけ（指示・連絡）」、「児童・生徒の情報の共有」については、70%～75%程度の教員が「行っている（努めている）」と回答している。
- ・ 「児童・生徒の情報の共有」に比べて、「授業に関する情報の共有」の割合が低い。
- ・ 50%程度の教員が、介護士との役割分担が「明確になっていない」と考えている。
- ・ 65%程度の教員は、介護士との連携により「児童・生徒の安全が確保されている」と考えている。

### ウ 主な自由記述

- ・ 教員も介護士も気持ちよく、生徒も楽しくいられるよう指示出しに努めている。
- ・ 生徒にとって今、何が一番必要なのかを一緒に考えていくことは有意義と感じている。授業のリーダーシップを教員がとる中で、とても頼れる存在である。
- ・ 介護士に入ってもらえて本当に助かっている。情報をきちんと共有し、方向性も確認してもらえれば、何の問題もない。
- ・ いろいろな考え方があると思うが、新しい見方を入れていくことも必要だと思う。その都度、従来の方法を見直すきっかけになると思う。
- ・ 図工等、人手が足りない時には、介護士も手指操作を手伝ってほしい。
- ・ 授業でも内容にまったくノータッチというわけにはいかない。指導に関する部分にも踏み込んでいる（グレイゾーンあり、仕方ない面もあり）。
- ・ 授業は基本的に教員のみで行うようにしている。授業は教員で行うべきと思う。
- ・ 介護士は授業に入らないと聞いているので、ある程度の情報しか共有していない。
- ・ 協働ができていると思う。ただ、ミーティングの時間がまったくとれない。

### エ 集計結果から

- ・ 70%強の教員が、児童・生徒の情報の共有等に基づき、日常生活に関する内容を中心に介護士への積極的な働きかけを行い、協働体制の構築に努めていることがわかる。
- ・ また、60%程度の教員が、授業に関する情報の共有に基づき、授業場面におけるチームワークの形成に努めている様子がわかる。
- ・ 50%程度の教員は「役割分担が明確になっていない」と感じていることから、試行導入の結果に基づく役割分担の整理が必要である。
- ・ 今後、他の都立肢体不自由特別支援学校への導入の拡大に向けては、授業中における協働の在り方をより明確にすること、打合せ時間の確保や方法の工夫を行うことなどが課題である。

### (3) 介護士を対象とした調査結果の概要

#### ア 集計の結果

No.	設 問	そう思う まあそう思う	あまり思わない 思わない	どちらとも 言えない
1	教員からの積極的な働きかけがある	67.8%	29.0%	3.2%
2	児童・生徒の情報の共有に努めている	73.6%	19.3%	6.5%
3	授業に関する情報の共有に努めている	48.4%	41.9%	9.7%
4	教員との役割分担が明確になっている	77.4%	22.6%	0%
5	連携により児童・生徒の安全が確保されている	90.3%	9.7%	0%

#### イ 全体の傾向

- ・ 「教員からの積極的な働きかけ（指示・連絡）」、「児童・生徒の情報の共有」については、70%程度の介護士が「ある（努めている）」と回答しており、教員の回答とほぼ一致している。
- ・ 「授業に関する情報の共有に努めている」と考えている者の割合が、教員に比べて低い（教員比：-10%）。
- ・ 「役割分担が明確になっている」と考えている者の割合が、教員に比べて高い（教員比：+28.3%）。
- ・ 「児童・生徒の安全が確保されている」と考えている者の割合が、教員に比べて高い（教員比：+26.7%）。

#### ウ 主な自由記述

- ・ 介護マニュアル作成時にケース会議を行い、生徒の情報について説明があった。毎日の連絡帳も確認させてもらっている。不明な点がある時など、質問させてもらえる環境である。
- ・ 肢体不自由教育部門に通っている生徒にとって、トイレ等の日常生活動作も教育の一環と考えられる。生徒と日々、そういう場面では同じように繰り返し接する介護士が与える影響は大きいと感じている。介護士は介護の専門家として接しているが、教育という面で生徒に多分に影響を与えているということ、教員とともによく考察していく必要がある。
- ・ 「介護士は教育（授業）に関わってはならない」という考えがあるようだが、教育の現場に入っている以上は、その一翼を担わなければならない部分は出てくると思う。
- ・ 役割分担を明確にし、徹底してほしい。個別指導計画、学習指導案を見せてほしい。教員の忙しさを軽減するために、介護士ができることがもっと考えられると思う。

#### エ 集計の結果から

- ・ 大半の介護士は、教員からの指示・連絡によって児童・生徒の安全の確保等に努めていると思われる。
- ・ また、日々の介護業務を通じて児童・生徒と関わる中で、児童・生徒のより良い成長・発達に向けて自らが果たすべき役割への意識を高めている様子がわかる。
- ・ 今後、他の都立肢体不自由特別支援学校への導入の拡大に向けては、介護士の立場や役割分担、教員との協働の在り方等をより具体的に示し、双方の高い意識に基づく協働体制の構築に努めていく必要がある。

### 3 教員と介護士の協働に関する現状と課題

#### (1) 積極的な働きかけ（指示・連絡）について

##### ア 現状

- ・ 70.9%の教員が「介護士への積極的な働きかけを行っている」と回答していることや、67.8%の介護士が「教員からの積極的な働きかけがある」と回答していることから、教員と介護士の協働に当たっては、おおむね良好な指示・連絡関係を構築できていると思われる。
- ・ 一方で、20.0%の教員が「行っていない」、「あまり行っていない」と回答しており、介護士も29.0%が「積極的な働きかけはない」と回答している。
- ・ その理由として、教員からは「指示しても勝手に動く」、「指示しても理解できない介護士がいる」、「指示しても期待以下の働きが多い」など、介護士の専門性に関する疑問が指摘されている。
- ・ また、介護士からは「どう指示して良いのか理解できていない。教員もよくわからないと言っている」、「明確な役割分担がないため遠慮している様子」、「日によって指示が違う」など、不明瞭な役割分担に起因すると思われる教員の対応に、介護士も戸惑っている様子が見られる。

##### イ 課題

- ・ 教員と介護士が円滑な協働関係を構築するためには、双方の専門性が一定程度確保されていること、相互の専門性に対する理解と尊重があること、それぞれの専門性に基づく役割分担が明確になっていることなどが前提となる。
- ・ 今後、他の都立肢体不自由特別支援学校への導入の拡大に向けては、①教員の指示等を的確に理解・遂行できる専門性の高い介護士の確保に努めること、②介護士に対し、教員が適時・適切な指示・連絡を行うことができるよう、「学校向けマニュアル」を作成するなどして役割分担をより明確にすること、などが課題である。

#### (2) 児童・生徒の情報の共有について

##### ア 現状

- ・ 74.6%の教員が「思う」、「まあそう思う」と回答していることや、73.6%の介護士が「思う」、「まあそう思う」と回答していることから、教員と介護士の間では、児童・生徒に関する情報の共有が一定程度なされているものと推測される。
- ・ これは、「普段接している児童なので、情報を共有しながらでないと安全等に配慮が行き届かない」、「立場にかかわらず、積極的に情報交換を行うことが、後々の行き違いを減らす・なくすことにつながる」といった児童・生徒の安全の確保の意識に基づくものと思われる。
- ・ 情報交換の内容としては、児童・生徒の健康状態、自宅での様子、指導上の留意事項、教員と介護士双方の気付きなどである。
- ・ 情報共有の具体的な方法としては、個別指導計画の共有、記録ノートの交換、連絡帳の提示、個別指導計画や介護マニュアルの作成に関するケース会の実施などのほか、始業前や児童・生徒下校後に短時間の打合せ時間を確保するなど、学校や学部・学級の実情に応じた工夫がなされている。

##### イ 課題

- ・ 現状では、「個別指導計画は個人情報なので提示していない」といった記述に代表されるように、教員一人一人の考え方の違い等によって、個別指導計画を共有している

学級としていない学級があるといった違いが生じている。

- ・ 教員と介護士が協働関係を構築する上で、個別指導計画等の共有は不可欠である。今後、他の都立肢体不自由特別支援学校への導入の拡大に向けては、個別指導計画をはじめとする児童・生徒に関する情報について、教員個々の考え方によって対応の違いが生じることがないように、共有の方針を明確にする必要がある。
- ・ また、「介護士の作成している資料をもっと有効に活用できたらと思う」といった指摘にもあるように、介護に関する専門的な知識・技能を有する介護士が作成する書類を、日々の教育活動の充実に役立てる工夫も大切である。

### (3) 授業に関する情報の共有について

#### ア 現状

- ・ 打合せ時間の確保が難しい中、教員は、「授業場面における円滑な協働のために学習指導案を事前に配布する」、「指導略案にメモ欄（「気付いたこと」を記入）を設ける」、「授業の始めに生徒に授業内容を予告すると同時にポイントや介助方法を伝える」などの工夫を行っている。
- ・ しかし、「思う」、「まあそう思う」と回答している教員の割合（58.2%）が、児童・生徒の情報の共有（74.6%）に比べて低い。
- ・ この背景には、授業における協働の在り方が明確になっていないことのほか、一部の教員には「授業は教員だけで行う」といった意識があることが推測される。
- ・ 「授業に関する情報の共有に努めている」と回答している介護士の割合が48.4%（教員比：約10%）にとどまっていることや、「授業に関する情報を共有したい」、「学習指導案を見せて欲しい」といった介護士の記述があることが、そのことを裏付けていると思われる。

#### イ 課題

- ・ 着替えや排せつ、食事、移動・移乗などの日常生活の介護場面に比べて、各教科等の授業場面における役割分担と協働の在り方について不明確な部分が多い。
- ・ 今後、他の都立肢体不自由特別支援学校への導入の拡大に向けては、教員の考え方の違いによって対応の違いが生じることがないように、授業場面における介護士の関わり方についての方針を明確にする必要がある。
- ・ また、「学校向けマニュアル」等においても、具体的な実践例などを示していくことが大切である。

### (4) 役割分担について

#### ア 現状

- ・ 「役割分担が明確になっている」と考えているのは、教員が49.1%であるのに対して介護士は77.4%と、大きな違いがある。
- ・ この背景には、介護士自身は「日常生活面の介護が業務」という自覚を有しているのに対し、教員は「日常生活面の介護も指導（教育）の一環」といった意識があることから、役割分担の範囲やそれに基づく指示・連絡の在り方に個人的見解の相違や迷いが生じていることが推測される。
- ・ このことは、「教員との役割分担がマニュアル化されておらず、統率力のある教員がいる学級とそうでない学級で、連携や円滑な授業進行に開きがある」といった保護者の指摘からもうかがうことができる。

## イ 課題

- ・ 今後、他の都立肢体不自由特別支援学校への導入の拡大に向けては、「学校向けマニュアル」を作成するなどして具体的な役割分担を明確にすることはもとより、理学療法士等の外部専門家や看護師及び介護士それぞれが、専門性を十分に発揮して児童・生徒の指導に臨むことができるようにするために、これからの都立肢体不自由特別支援学校の教員に期待される役割や資質についても明らかにしていく必要がある。

## (5) 児童・生徒の安全の確保について

### ア 現状

- ・ 「教員と介護士の連携により、児童・生徒の安全が確保されている」と考えているのは、教員が 63.6%であるのに対して介護士は 90.3%と大きな違いがあり、教員はより一層の充実が必要であると考えていることがわかる。
- ・ 実際の状況は、永福学園と青峰学園においては、試行導入を行った2年間の重大事故報告件数はいずれも0件であり、他校との比較において児童・生徒の安全が確保されていることは、教員と介護士の協働によるものと高く評価できる。
- ・ しかし、一方で、「安全確保に全ての信頼をおけるほど、認識と意識の高い介護士が少ない」といった教員の指摘や、「介護士の方が安全性を考えた対応をしている」といった外部委員の指摘があるように、児童・生徒の更なる安全の確保に向けては、相互に専門性の確保・向上に努める必要があることもうかがえる。
- ・ また、「介護士が関係したインシデントは報告義務がはっきりしないので、インシデントが事故防止につながらない」といった指摘に代表されるように、介護士が関係するインシデントやアクシデントが発生した際の責任の所在について、教員が不安を感じている様子が見られる。

### イ 課題

- ・ 教員と介護士の協働による児童・生徒の安全の確保に向けては、教員が信頼をして介護業務を任せられることのできる専門性の高い介護士の確保・配置に努めると同時に、介護技術の習得に向けた教員研修を充実させるなどして、双方の専門性の更なる向上を図る必要がある。
- ・ また、介護士が関係するインシデントやアクシデントの責任の所在、報告及び再発防止の手续等についても、教員が負担や不安を感じることがないように、「学校向けマニュアル」等において危機管理体制を明確にしておく必要がある。
- ・ 「誰かが見ているという思いがあるが、実際どれくらい見ているのか。大人が多いただけ油断もあると思う」という保護者の指摘にもあるように、介護士の配置によって安全管理体制が充実したことが気の緩みにつながることはないよう、十分な配慮が必要である。

## 4 アンケート調査の結果等から

- 介護士の導入は、保護者におおむね受け入れられつつあると思われる。また、多くの教員は、児童・生徒や授業に関する情報の共有に努めながら、介護士に対して積極的な働きかけを行い、円滑な協働体制を構築しようとしていることがわかる。
- 介護士の意識からも、日々の介護業務を通じて肢体不自由の児童・生徒や特別支援学校の教育に対する理解を深め、児童・生徒一人一人のより良い成長・発達のために、「介護の

専門家として何ができるか」を追求しようとしている様子がかがえる。

- こうしたことから、今回の試行を通じて、教員及び介護士双方が高い意識を持って協働体制を構築することができれば、児童・生徒一人一人の学校生活はより豊かなものとなるであろうという手応えが得られたと考える。
- しかし、一部の教員には、介護士の導入が教員という仕事域や児童・生徒の学習権の侵害であるといった意識があり、「ただ介護する人たち」、「単なる介護」、「介護されるだけ」といった表現に代表されるように、介護業務や介護士に対する理解の不足が感じられる。
- 介護士の専門性に対する教員の信頼度も影響すると思われるが、教育内容・方法の充実に向けた円滑な協働体制を構築するためには、互いの専門性への理解と敬意を基盤に、誰もが気持ち良く職務を遂行できるような職場の雰囲気醸成することが重要である。
- 今後、他の都立肢体不自由特別支援学校への導入の拡大に向けては、個々の教員の考え方や理解によって対応に違いが生じることがないように、介護業務や介護士の立場及び教員の役割など、協働関係を構築する基盤となる認識について共通理解を図る必要がある。